

真宗大谷派における同朋会運動

大谷大学 藤原正寿

真宗大谷派における同朋会運動とは、1962（昭和 37）年に当時宗務総長であった訓覇信雄によって提唱された信仰に基づく宗門改革の運動である。具体的には、前年の1961年の宗祖親鸞聖人七百回御遠忌法要を機縁として、今後の教団の方向性として、「同朋会の形成促進」ということを打ち出すところから始まる運動で、その願いは、信仰に基づく共同体（共に生き合う社会）を実現することを教団の使命とするということにある。

同朋会運動を提唱した訓覇は、1948年に真人社という在野の信仰結社を曾我量深、安田理深らと結成し、教学を推進する運動を展開した。その特徴は、信仰の問題を単に個人の問題としてではなく、人間社会と如来の世界である浄土との関係の問題であり、同時に一人ひとりがどういう関係性を生きるのかという問題であるという（共同体）の回復を願うものであると捉える点にあった。

この真人社の活動の契機となったのが、金子大榮、曾我量深らが相次いで宗門立の大学である大谷大学を追放されるという出来事であった。1922年に大学令による大学となり、真宗大谷大学から大谷大学へと改称された大谷大学は、1924年には、学長佐々木月樵が、「大谷大学樹立の精神」を告辞し、そのなかで「仏教の解放はただ世間に解放するのが主ではなくして、真の解放は、学として之を学会に解放して之を国民一般に普及することではなければならぬ」と述べ、閉鎖的で専門学校的な宗門大学から、脱皮して近代的な文科の大学として出発することになる。ところがそこに、これまでの伝統的な真宗理解との衝突が生じ、1928年には、金子大榮が、異安心と決めつけられ、教授職解任、僧籍剥奪という処分を受け、1931年には、曾我量深も辞職勧告を受け大谷大学を去っていく。その時に、両教授の解任反対のストライキをした学生たちが開いたのが、「興法学園」という共同生活をしながら、仏教を学ぶ学場であった。曾我量深、金子大榮の講義を聴くことを中心に、安田理深を立てて、訓覇や松原祐善らがそこで学んだ。

親鸞聖人の教えを聞思し、その教えを世に公開するという大切な使命を担った学問の場が、親鸞の教えを守るべき教団組織から弾圧される。それは、宗門が、自らの体制組織を維持するために、都合のよいいわば御用教学を求めていたことの証左である。教団は、常に濁世の中にあって教団組織そのものを維持していこうという保身的立場に陥りやすい。その教団の閉鎖性を内から破ることができるのが、社会に真宗学を捧げること

によって、親鸞の精神を公開しようとする課題意識であり、この課題意識に目覚めた者たちが中心となって始めた活動が真人社という運動である。この運動を契機として、同朋会運動は起こってくるのであるが、その源流は、これらの運動に関わってきた者たちの精神的支柱とも言うべき清沢満之（1863-1903）という人物である。

同朋会運動とは、常に歩みを止めることなく、教団に関わる一人ひとりが形骸化し、自己肯定しようとしていく教団のあり方を問い続けることに他ならない。問題がおこることが教団にとっての危機ではなく、問題が問題として見えなくなり、現状の組織の上に安逸を貪ることが危機的状況なのだと気づいていくことが同朋会運動の精神である。

【キーワード】 同朋会運動・清沢満之・親鸞